

越境する世界宗教 ——グローバル化時代の神々のゆくえ——

沼 尻 正 之

World Religion Crossing The Border : The Future of Gods in the Era of Globalization

Masayuki NUMAJIRI

要 約

本稿は、現代日本に流入しつつある様々な外来宗教について、その動向を概観し、それらが日本社会の中で持つ意味を考察することを目的としている。取り上げる対象となるのは、日本が高度成長を遂げた1980年代以降に新たに勢力を拡大した外来宗教である。その際、日本全体を対象にするのは無理があるので、主に関西地方に限定して話を進めたい。

まず取り上げるのは、日本におけるイスラム教の現状である。1990年代以降、各地に多くのモスクが建設されるなど、イスラム教は日本に急速に根付きつつあるが、ここでは大阪茨木のモスクと、京都のモスクについて概観する。更に、新たな動向として、イスラム系新宗教であるアハマディア・ムスリム協会について論述する。

次に話題にするのは、東南アジア系の仏教である上座部仏教が、日本に定着しつつある様子である。具体的には、タイで近年信者を増やしつつあるタンマガイ寺院が、本国タイとは異なり、日本においては、在日タイ人のコミュニティとして機能している様子や、スリランカ系のテーラワダ仏教協会が、日本の若者たちに「癒し」を提供している様子などを、検討していく。

こうした事例の検討を通して、最終的に、現代日本において勢力を拡大しつつある外来宗教の特質に関する考察を試みたい。

キーワード：外来宗教、現代日本、イスラム教、上座部仏教、外国人労働者

はじめに

日本における外来宗教の歴史は古い。古くは6世紀に中国から仏教が伝来して以来、日本には数多くの宗教が入ってきている。仏教は既に完全に日本化して定着しているし、儒教や道教も、教団宗教というかたちではないが、一種の宗教文化として、日本に根付いている。主に明治以降に本格的に日本に入ってきたキリスト教は、隣国である韓国などに比べれば、きわめて小規模ながら（人口の約1%程度）、やはりその文化的な面も考え合わせるならば、日本の中で一定の地位を占めていると言える。

しかし、それ以外の海外宗教となると、さほどよく知られているとは言えないのが現状ではないだろうか。とりわけ、日本が好景気を迎えた1980年代以降、多くの外国人労働者が日本に入ってきた時に、彼らとともに日本に入ってきた外来宗教のことは、一般にはほとんど認知されていないと言っても過言ではない。しかし、単にわれわれが知らないだけで、近年様々な新しい外来宗教が日本に入ってきて、各地で着実に定着しているのである。

本稿では、主に関西地方におけるそうした新しい外来宗教の動向を概観し、日本の宗教文化の中でそれらが持っている意味について、考察してみたい。

1 『となりの神さま』

最近、宗教研究者の間で話題になった本に、裴昭(Pae So)著『となりの神さま—ニッポンにやって来た異国の神々の宗教現場』（裴昭 2007）がある。著者の裴昭は、在日コリアンで、日本における外国人の現状を中心に取材・執筆活動を行っている、フォトジャーナリストである。彼はこの書物の中で、イスラム教や仏教、韓国キリスト教といった外来宗教が、いかに一般には認知されないかたちで（アパートや雑居ビルの一室を宗教施設にするなどといったかたちで）、しかし確実に日本社会に根付きつつあるかを、描き出した。そうした宗教の中には、施設に看板も掲げず、電話番号も登録していないものも多い。それらはまた、宗教法人としての登録もなく、もちろんホームページなども持っていない。つまりは、外部の者にとっては、「見えない宗教」なのである。

イスラム教について書かれた部分を見てみよう。東京には、よく知られているように、東京ジャーミー¹⁾という、非常に立派なモスクがある。トルコ文化センターも兼ねたこのモスクは、本場アラブ諸国に持って行っても恥ずかしくない立派な建物だ。しかし、裴昭が描き出すのは主に、住宅街の一角に、普通の家々と並んで存在するモスクである。文京区にあるマシド大塚や、千葉の市川にある行徳ヒラーモスクなどは、大きさは普通の住宅とさほど変わらないものの、屋上にミナレット（尖塔）を備えるなど、外観的には宗教施設だと分かる造りになっているが、新宿や池袋の繁華街にある、雑居ビルのワンフロアを改造したモスクとなると、外からその存在

を確認するのは困難である²⁾。そうしたモスクでは、しばしば部屋に人が入りきらず、廊下や屋上、場合によっては地下道で、礼拝が行われるという。これらのモスクに集まる人々の国籍は、パキスタン、バングラデシュ、マレーシア、インドネシア、エジプトなど、実に様々だ。

モスクによって、中心となる人々の国籍は異なるが、ムスリムであるならば、国籍の違いはあまり重視されない。ただし、宗派の違いは大きく、スンニ派のムスリムとシーア派のムスリムが、同じ場所で礼拝を行うことは、まずないと言ってよい。したがって、シーア派が多数を占めるイラン人などは、また別の施設を祈りの場としていると考えられる。ともあれ、『となりの神さま』には、都会のビルの中で、押し合いへし合いしながら、メッカの方角に向かって一心不乱に祈りを捧げる、ムスリムたちの姿が活写されている。

イスラム教以外にも、文京区の雑居ビルに入っているミャンマー仏教の寺院や、新宿の木造アパートの一室で礼拝を行う韓国キリスト教の教会、江戸川区の公団住宅に祀られたヒンドゥー教のガネーシャ神など、この本は、日本にいつのまにか入り込み、定着しつつある外来宗教の現在を、興味深く描いている。

私自身、日本における外来宗教の現状に関心を持っていたこともあり、またこの裴昭の著作に刺激を受けたこともあって、しばらく以前から、主に関西圏における外来宗教について調べるようになった。彼の著書は、主に関東地方における外来宗教を取り上げたものであるため、関西など、その他の地域の外来宗教については、あまり詳しくは触れられていない。またそもそも、現在日本に存在する外来宗教の数から考えれば、この本で取り上げられている宗教は、ごく一部に過ぎない。したがって以下では、彼の著作を補う意味も含め、比較的近年になって日本に入ってきた外来宗教の現状について、関西地方の動向を中心に一もちろんその全貌を描くというのにはほど遠いほど断片的なものにならざるを得ないが—まとめてみたい。

2 神戸における外来宗教

以下、宗教の種別によって、その動向を論じていきたいのだが、しかし、その本題に入る前に、少しだけ神戸における外来宗教ということテーマとして、論じておきたい。神戸は、港町として古くから海外との貿易の拠点となり、多くの外国人が居を構え、それゆえに外来宗教施設が数多く作られてきたため、関西における外来宗教について考える際には、ひとつの基点となる場所だからである。

神戸にはまず、有名な神戸モスクがある。JR三宮駅から歩いて10分程度、通称パールストリート沿いに立つこのモスクは、先に挙げた東京ジャーマニに比べれば、やや規模は小さいものの、歴史的にはこちらの方が古く、設立は1935年と、現存する日本最古のモスクとなっている。関西在住のムスリムたちにとってのセンター的存在となっており、礼拝には常時100人以上のムスリムが参加する。またラマダン（断食月）明けの祭り（イド・アル・フィトル）など、大きなイベ

ントの際には、1000人以上のムスリムが集まることもあるという。モスクのまわりには、何軒かのハラール・フード・ショップ（ムスリム用の食料品店）があるが、これほどの密度でそうした店がある場所は、関西には他にない。

このモスクからそう遠くない、異人館通りの少し北には、ユダヤ教のシナゴークがある。これは、日本にある2つしかないシナゴークの内の1つである（もう1つは、東京の広尾にある）。「関西ユダヤ教団」という看板を掲げたこのシナゴークには、イスラエルから派遣された、ロバート・シュトラウスベルクという名前のラビが住んでおり、礼拝など一切の行事を取り仕切っている。このラビによれば、関西ユダヤ教団の概要は、およそ以下の通りである。まず神戸シナゴークの設立は1970年で、関西在住のユダヤ人たちの寄付により建設された。現在関西には数百人のユダヤ人が住んでいるが、週末の礼拝にシナゴークを訪れるのは、そのうちおよそ40～80人程度で、大きなイベントがある時には、参加者が100名を越えることもある。基本的に、非常に緩やかなコミュニティで、信者たちの詳しい個人情報を、ラビは把握していないという。シナゴークを訪れるユダヤ人の多くが40歳以下と、年齢層はかなり低い。職業としては、大学関係者、IT技術者、貿易などが主なところだという。

更に、このシナゴークから徒歩数分のところには、ジャイナ教の宗教施設である、バグワン・マハビールスワミ・ジェイン寺院がある。両脇を普通のビルに挟まれ、多少窮屈な感じではあるが、おそらくは総大理石造りと思われる白亜の寺院は、異人館通りの中でもかなり異彩を放っている。ジャイナ教とは、仏教誕生とほぼ同じ、紀元前6～5世紀に、インドで生まれた宗教であり、輪廻と解脱を説き、とりわけ不殺生戒を重視する宗教である。仏教とは異なり、インド国外に広まることはなく、またインド国内でも、少数派の宗教であり続けた。現在、ジャイナ教徒は、インドの全人口の約0.5%と言われるが、経済的に豊かな信者が多く、また強い団結力を持つことから、信者数の少なさにも関わらず、インドでは社会に対して強い影響力を持っている。神戸の寺院の設立は1985年と、比較的新しい。日本に居住するジャイナ教徒の数は不明だが、ほとんどが西インドのグジャラート州の出身者で、真珠の貿易で財をなした者の多いことが知られている。

神戸にはまた、シーク教の宗教施設も存在する。シーク教は、16世紀の初め、インド北西部のパンジャブ地域で成立した宗教で、開祖であるグル（師）・ナーナクが、イスラム教の影響を強く受け、ヒन्दゥー教から分派するかたちで創始したものである。現在インドを中心に約2000万人の信者がおり、日本には約1000人のシーク教徒がいると言われている。おそらくは日本で唯一と思われるシーク教寺院、グル・ナーナク・ダルバールは、阪急神戸線・王子公園駅を山側に10分程登ったあたりにある。普通の民家を改造したと思われるこの寺院は、1階が食堂、2階が礼拝場所となっている。この寺院で世話役をしているナリンダー・セティによれば、シーク教が日本に入ってきたのは1950年頃のことで、神戸のこの寺院は、1960年頃に、有志の寄付により購入されたという。毎週日曜日の昼間に礼拝が行われ（来日4年目の導師グランティー・ジにより執り行われる）、およそ70～80人ほどの信者が集まる。礼拝の後は、1階の食堂で、カレーなどの

昼食が提供される。

以上、神戸に位置するいくつかの外来宗教について概観してきた。神戸には他にも、東方正教会系の神戸ハリストス教会や、中国キリスト教の教会である神戸基督教改革宗長老会、同じく中国の道教系新宗教である道院紅卍字会、韓国の東学の流れをくむ天道教の日本支部（世界で唯一の海外支部）、インド系の新宗教であるラダ・ソアミ・サッサング・ベアスなど、実に多くの外来宗教が存在している。神戸に限定しても、そこに位置する外来宗教の全貌を捉えることは、容易ではない。こうした神戸の状況は、確かにその他の都市とはやや異なっているが、しかし決して例外的なものではない。以下では、より範囲を広げて、日本における外来宗教の現在を探ってみよう。

3 イスラム教³⁾

3-1 日本におけるイスラム教の現況

現在日本にどのぐらいの数のムスリムが住んでいるか、その正確な統計データは存在しない。文化庁が毎年発行している『宗教年鑑』に、カテゴリーとして存在するのは「神道」「仏教」「キリスト教」「諸教」のみであり、「イスラム教」はない。また日本のムスリム人口の大半を占めるとされる来日外国人（日本人ムスリムも近年増えているとはいえ、割合としてはごく少数である）については、入国カードや外国人登録証に宗教に関する記載欄がないので、その宗教帰属について知りようがない。したがって、日本在住のイスラム教国出身者数から、およその数を推計するしかないのであるが、これについても、アラブ諸国やパキスタンのような、ほぼ全ての国民がムスリムである国ならばよいが、マレーシアのような多宗教国家から来た人たちのどの程度がムスリムであるか、正確に知る方法はない⁴⁾。

このように、日本のムスリム人口を推計するのは困難だが、桜井啓子がかつてこれを試みている（桜井 2003: 29-46）。桜井はまず、『在留外国人統計』（法務省入管協会発行）から、イスラム諸国会議機構（OIC）加盟国（57カ国）出身者を取り出し、そこから短期滞在者（観光、商用など）を除いた約42000人を、在日ムスリム人口の「核」と見なす。これに、『在留外国人統計』には含まれない不法残留者のムスリム人口約21500人と、日本人ムスリム約7000人を加えた、約7万人という数が、21世紀初頭の日本におけるムスリム人口であると、桜井は推計している。

日本に多くのムスリムたちが来るようになったのは、1980年代半ば頃からのことである。円高を背景に空前の好景気にわいていた日本に、当時多くの外国人労働者がやって来たが、その中にムスリムたちもまたいた。その後、90年代初頭にバブルがはじけて不況の時代に入ったこと、また外国人労働者の流入を制限する政策が取られるようになったことなどもあって⁵⁾、当初の勢いはなくなったものの、その後も来日ムスリムの数は増え続けた。

それでは、この在日ムスリムたちの出身国で多いのはどこだろうか。これについては、2007年

度の統計データを元に上位の国を挙げると、以下ようになる。まず最も多いのは、インドネシアで27250人、次いでバングラデシュの11414人、パキスタンの9856人、マレーシアの8291人、イランの5059人、このあたりが上位となる。なお、この上位5カ国については、上記の桜井の著作(2000年の統計データを使っている)で挙げられている国と同じである⁶⁾。

次に、これらの滞日ムスリムたちの居住地について見てみよう。その際、上記5カ国の出身者たちが、日本におけるムスリムの大きな部分を占めていることから、これらの国々の人たちの居住地を見ることで、滞日ムスリム全体の傾向を知ることができるものとする。まず最も多いのは東京都で、5カ国出身者の合計が、11333人である。以下第2位は埼玉県で5609人、3位は神奈川県で5147人、4位は愛知で5041人、5位は千葉で4027人、6位が静岡で3369人となっている。なお関西は、大阪が2577人、兵庫が1286人、京都が711人である。これを見れば明らかのように、日本にやって来たムスリムの多くが関東地方に居住し、次いで愛知を中心とする東海地方に住んでいることがわかる。関西は、大阪がやや多めではあるが、全体としては他の地域よりも少なめであると言える。

では、イスラム教における祈りの場であるモスク(マスジド)は、現在日本にどのくらいあるのだろうか。これについては、日本におけるイスラム教の情報を集めたインターネットのサイト「イスラム便利帳」に、詳細なデータがある。これによれば、2009年8月の時点で、日本には合計52のモスクがある。モスクの建設が急速に進み始めたのは、1990年代に入ってからで、その最初のものが、多くの研究者がその重要性を指摘している、埼玉県の「一ノ割マスジド」である。神戸モスクや東京ジャーミイなどとは異なり、90年代に入ってから次々と造られていったモスクは、在日ムスリムの寄付をもとに建設されたという特徴を持っている。90年代には11のモスクが造られ、2000年代には37のモスクが造られている。もっとも、これら新しいモスクの中には、普通の民家を転用したものや、廃業したコンビニをそのまま利用しているものなど、一般の日本人がイメージするモスクとはかけはなれた施設も多い。なお、今ある52のモスクの地域分布は、関東地方に26と、ちょうど半数があり、中部地方(北陸地方を含む)に12、近畿地方に4、四国地方に3、北海道・東北・九州地方にそれぞれ2、中国地方に1となっている。

3-2 関西地方のイスラム教

関西地方には、上記のように4つのモスクがある。その内2つは大阪に、その他神戸と京都に1つずつのモスクがある。神戸については先述の通りなので、ここでは大阪と京都のモスクについて論述してみよう。

大阪のモスクは、一つは大阪市西淀川区にある「大阪モスク」であり⁷⁾、もう一つは茨木市にある「茨木モスク」である。ここでは後者の方を取り上げることとしたい。茨木モスクは、国道171号線の豊川交差点を少し東に行ったあたり、ボーリング場のROUND1の横の道を南に少し入ったところにある、一見普通の民家に見える建物である。壁に小さな「大阪イスラム文化セン

ター」という看板がなければ、一般の民家と区別することは困難だ。以下、この茨木モスクについて、関係者へのインタビューをもとに、簡単にまとめてみたい。

茨木モスクができたのは、2006年3月のことで、イギリス人ムスリムのアブダヌール・ブリュワー (Abdanur Brewer) 氏を中心となって、一般の民家を買って取ってモスクとしたという。なぜ、決して便利とは言えない、茨木のこのような場所にモスクを造ったのかだが、この場所を選んだ最大の理由は、大阪大学に近いことだという。つまり、このモスクに通ってくるムスリムの多く(約8割)が、大阪大学を中心とする大学・研究機関に所属する学生・研究員であるため、彼らのためにこの場所が選ばれたというのである。実際、このモスクを運営しているのは、OMA (Osaka Muslim Association) というムスリム学生の組織であり、学生たちが半年ごとに持ち回りで、会長・会計など各種の役職を担当し、モスクの活動を自主的に運営しているという⁸⁾。

礼拝も自主的で、礼拝を主導するイマームはおらず、毎回選ばれた担当者がみなの前に出て、儀礼を進める。担当者は、インドネシア人、バングラデシュ人、エジプト人、マレーシア人など様々な国籍の参加者たちに対して、アラビア語と英語の2カ国語を用いて、コーランの内容を織り込んだ話をし、祈りを唱える。金曜礼拝には、毎回20~30人程度のムスリムが訪れるという。また約1ヶ月間の断食が行われるラマダン月には、毎晩ここで礼拝が行われる。この断食期間の最終日にはイド・アル・フィトルと呼ばれる祝宴が行われ、特に多くの人々が集まるが、2009年のイドには、100人近くのムスリムがここを訪れ、モスクの外にある駐車場にまで人があふれるかたちで礼拝が行われた⁹⁾。

礼拝参加者の多くが学生であるという点では、京都モスク (京都イスラーム文化センター) も同様である。こちらは、京都大学を中心とする大学に所属する留学生が多数を占めている。ただし、京都モスクが大阪茨木モスクと異なるのは、ここが一人のリーダーの強力な指導のもとに運営されている点である。京都モスク代表のギュレチ・セリム氏は、1990年来日したトルコ人で、京都ではしばしば新聞やテレビなどにも登場する有名人であり、日本人にイスラム教を紹介する活動を精力的に行っている人物である。例えば彼は、毎月一回程度「トルコ料理とイスラーム文化の会」という催し (参加費無料) を開き、イスラム文化の紹介に努めている¹⁰⁾。

京都モスクは、四条河原町を1km程北に上がった荒神口の交差点近くに位置する近代的なビルの中にあり、外見からはそれがイスラム教の施設であるとは全く分からない。1階には、日本人職員の常駐するオフィスがあり、地下1階が100名ぐらいの人が入れる礼拝所となっている。金曜礼拝には、50~100名のムスリムがここを訪れるという。来訪者は、前述のように大半が学生だが、中には家電メーカーやコンピュータ関係の企業に勤務もしくは研修に来ているIT技術者なども多いようである。国籍は、茨木モスクと同様、インドネシアをはじめ、アジアやアラブ諸国など様々である。

3-3 中部地方のイスラム教—アハマディア・ムスリム協会

2009年に、中部地方のいくつかのモスクを訪れ、関係者に話を聞いた。具体的には、富山モスク、新安城モスクなどである。富山は中古車売買に従事するパキスタン人が多く、また新安城を含む東海地区は、トヨタなどで製造業に従事するムスリムが多いため、それぞれモスクが盛況を見せている。しかし、本稿は関西地方の外来宗教をテーマとしているため、それらについてはここでは触れず、また別の機会に詳しく論じたいと思う。ただ、中部地方のイスラム教を調べる中で、やや特殊なイスラム教の団体について知る機会があったので、ここでは—やや本稿のテーマを逸脱することになるが—それについて簡単に触れておきたい。

その団体、アハマディア・ムスリム協会は、いわばイスラム教の中の新宗教であり、1889年に、インドのパンジャブ州に住んでいた、ハズラト・ミルザ・グラーム・アハマドによって創始された教団である。アハマディアでは、彼のことを復活した予言者と見なし、「約束されたメシア」と呼んでいる。イスラム教というと、通常スンニ派とシーア派の2つのみが一般に認知されているが、実はこうした新宗教も存在しているのである。19世紀にインドで始まった、このイスラム教の革新運動は、現在パキスタンを中心として活動の場を広げつつあり、世界180カ国に広まっているという。ただし、その中心地であるパキスタンをはじめ、多くのイスラム諸国において、アハマディアは異端と見なされ、活動を制限されるなど、厳しい状況に置かれている¹¹⁾。また創始者が死去した後、「約束されたメシア」の地位は後継者に引き継がれていき、2003年からは第5代目のカリフ、ハズラト・ミルザ・マスルール・アハマド(イギリス在住)が代表を務めている。

さて日本アハマディア・ムスリム協会であるが、その名古屋本部は、名古屋市名東区の住宅街にある普通の一軒家で、看板がなければ一般の住宅と区別はつかない建物である。ここの代表を務める、イマームのアニス・アハマド・ナディーン氏¹²⁾に話を聞く機会が持てたので、彼から得た情報も含め、以下このイスラム新宗教について略述してみたい。

アハマディアが日本に最初に入ってきたのは、意外に早く、1935年のことで、当初は神戸を拠点にしていたという。しかし第二次大戦などもあり布教は中断、それが復活するのは1970年代に入ってからであった。70年代は東京を中心に活動、その後80年代に入って、名古屋に本部を置いた。現在も本部は名古屋にあり、その他には東京に支部があるのみである。現在日本の協会に所属する信者は、約300人であり、国籍はパキスタン、インド、ネパールなどが主だが、日本人も20人ほどいるという（多くが外国人信者と結婚した女性）。

アハマディアの宗教としての特徴は、何と言ってもその「寛容さ」にあると言えるであろう。彼らはその教義の中で、繰り返し「平和」を訴え、また自分たちがキリスト教など他の宗教に対して敬意を払っていることを強調している。しかし、単に寛容であるというだけでなく、彼らはそこから更に一歩進めて、イスラム教の神も、キリスト教の神も、その他のあらゆる宗教の神も、根源的には同一の存在である、と主張する。これは、例えばジョン・ヒックなどが唱える「宗教的多元主義」と極めて近い考え方であると言えるであろう¹³⁾。いずれにせよ、「アラーは唯一の

神である」とする、正統的なイスラム教の考え方からは、かなり逸脱する教義である。

アハマディアの寛容さはまた、食に関してもあらわれており、彼らは、一般のムスリムよりも、ハラール（ムスリムにとって可食なもの）概念を柔軟に解釈している。彼らも、その他のムスリム同様、豚肉や酒は決して口にしないが、豚肉以外の肉については、いわゆる「ハラール食品」ではない（日本の普通のスーパーに売っている）ものも、食べてよいと考えている。なぜなら、そうした肉も、実質的にはコーランにあるような血の処理をしていると見なせるからであるという。これも、普通のムスリムからすれば、かなり抵抗を覚える考え方であるだろう。

一般に、伝統宗教から派生した新宗教というものは、もとの宗教よりも非寛容的で過激な教義を持ち、それゆえに社会の中で排除されることになるケースが多いが、このアハマディアの場合は反対に、通常のイスラム教と比べ、あまりに寛容であるため、異端とみなされ批判されるという、珍しい例であると言えるであろう。実際、イマームのアニス氏によれば、アハマディアは日本でも、たびたび一般のムスリムたちから非難されることがあるという。そうした、必ずしも前途有望とは思えない状況であるにもかかわらず、彼らは日本をはじめとする様々な国で、これからも布教を続けていくという。実際彼らは、地域のイベントなどに、教団として積極的に参加しており、可能な限り日本人ともコンタクトをとろうとしている。できるならば、日本人を自分たちの教団の信者に迎えたいとのことであった（ただし決して強引な勧誘などはしていない）。日本人の多くが持っていると思われるイスラム教のイメージとは、ややずれると思われる彼らの寛容さが、日本で多くの信者を獲得する日が来るかどうか、注目してみたいと思う。

3-4 まとめ

イスラム教のモスクについては、その所在地によって、来訪する者の社会層が異なる（高学歴者が多い所と労働者が多い所など）ということはあるにせよ、基本的にはどこも、本国においてムスリムだった者たちが集まる場としてのみ機能していると言える。いずれのモスクで話を聞いても、必ず、礼拝に来る日本人ムスリムが数人いる、というような話を聞かされるが、そうした人々はやはり例外であろう。実際、モスクに集まる在日ムスリムたちからは、特に日本人にイスラム教を布教しようという情熱は感じられない。ただし、新宗教であるアハマディアは、これとは異なり、日本人への布教により積極的であり、その点で注目すべき存在だと言えるであろう。

モスクに集まる人の国籍は様々であり、そこが国籍やエスニシティではなく、あくまで宗教を共有する人たちの集う場だということが分かる。この点が、その他の外来宗教、例えば仏教などとは異なる、（在日）イスラム教の特徴だと言えるであろう。

4 仏教

4-1 流入する上座部仏教

日本にとって仏教は、最も長い歴史を持った外来宗教である。古代から、主に中国を經由して、様々な宗派の仏教が輸入され、そして日本の中で独自の発展を遂げてきた。そんな「仏教国」である日本に、近年また新しい仏教が流入してきている。その中心は、いわゆる上座部仏教（南伝仏教）である。

インドで創始された仏教は、その後アジア各地に広まっていったが、これには大きく分けて、中国や朝鮮半島方面に伝わったいわゆる大乘仏教と、東南アジアに広まった上座部仏教とのふたつがある。日本に入ってきたのは大乘仏教であり、ごく最近まで、日本で仏教と言えば大乘仏教のことを意味していた。

ところが、1980年代の日本の好景気や、90年代以降のグローバル化の進展などにより、東南アジアの人々が数多く日本にやってくるようになると、それにともなって上座部仏教もまた、輸入されることとなった。

大乘仏教に様々な宗派があるように、上座部仏教にも国ごとに様々な種類がある。現在日本に入ってきているものとしては、タイ、スリランカ、ミャンマーなどの仏教が挙げられる。以下、いくつかの具体例を挙げて、検討してみたい。

4-2 タイ国タンマガーイ寺院

タイで生まれたタンマガーイ寺院は、上座部仏教系の新宗教で、その始祖と言うべき存在は、プラモンコン・テープムニー師（ソット師）(1885-1959)である¹⁴⁾。彼が、いわゆる「タンマガーイ式瞑想」の手法を作り上げた人物である。しかし教団が形成されたのは、彼の死後のことで、ソット師の弟子にあたる女性修道者のウバーシカー・チャン・コンノックユーン師（1909-2000）が、彼女について修行していた、タンマチャヨー師とタッタチャーウォー師とともに、1970年に仏輪瞑想センターを立ち上げたのが、教団の始まりである。この内タンマチャヨー師が、タンマガーイ寺院の初代住職となり、その後タッタチャーウォー師が2代目の住職となった。教団は、1970年代後半から、都市部を中心に急速に発展していく。なお現在でもこの二人が、教団運営のトップに立っている。

タンマガーイ式瞑想の最大の特徴は、出家者だけでなく在家信者に対しても、瞑想の諸段階を経て「涅槃」に達することを、究極の目的としておいていることである。この独自の瞑想法を広めていくにあたって、教団は、マーケティングの手法を取り入れ、またマスメディアを通じた大宣伝を行って、イベント化した儀礼に人を呼び込んだ。また近年では、インターネットや衛星放送などもフル活用して、国内の信者を増やすと同時に、海外にも積極的に進出している。本国タ

イにおけるタンマガーイ寺院の特徴は、高学歴の都市新中間層の若年信者が多いことにあるという。これは、後に述べるように、日本を含む諸外国における教団の情勢とは異なる、タイ独自の特徴だと言えるであろう。

なお、しばらくは順調に拡大していったタンマガーイ寺院であったが、1980年代に入って、寺院周辺の農民との間の土地をめぐるトラブルや、信者への寄付強要疑惑、幹部の横領疑惑などが次々と発生し、タイでは、社会問題を引き起こすカルト宗教、という目で見られる存在となった。

タンマガーイ寺院が海外布教を始めたのは1992年のことで、最初の布教国はアメリカであった。その後90年代を通して次々と海外支部を作り、その過程で日本にも支部が作られる。現在までに、世界20カ国以上に支部が作られているという。

現在日本には支部が7つあるが、その内西日本に位置するのは、大阪別院だけである¹⁵⁾。この大阪別院の設立は2000年のことで、当初は北区本庄東に寺院が置かれていたが、2006年に旭区大宮に場所を移し、現在に至っている。旭区の大阪別院は、住宅街の一角にある、一般の住宅としてはやや大きめの3階立ての建物で、以前服飾工場だったものを買い取って、寺院に転用したものだという。現在の住職はティラムロー比丘という人物だが、儀礼など様々な活動において中心となっているのは、前住職のタニョー比丘という人物である。まだ日本語が拙い前者に比べ、後者は日本語も流暢であり、現在龍谷大学の大学院で仏教学を研究中とのことであった。

このタンマガーイ寺院大阪別院を訪れたのは、2008年夏のことで、その頃ちょうど信者の子弟を対象とした「短期出家式」という儀式が行われていた。これは信者の子弟が一定の年齢（9歳～）になった時に、学校の夏休みを利用して、短期間の出家体験をする、一種の通過儀礼である。子どもたちは、ほとんどが日本人の父とタイ人の母の間に生まれたハーフである。2008年の夏には、17名の子どもが儀式に参加していた。

タンマガーイ寺院大阪別院に所属する信者の数は、前住職によれば約500人とのことだが、種々の話を総合すると、実際の信者数はその半分程度だと思われる。信者の居住地は、大阪を中心とする関西圏で、中には九州など遠方からの参加者もあるようである。また性別で言うと、信者の多くが女性で、その割合は約80%程度だと思われる。年齢層は40～50歳代が中心で、まとめると、若い頃に仕事を求めて来日し、その後日本人男性と結婚して、日本に定住することになった中年のタイ人女性というのが、典型的な信者層であると考えられる。高学歴の都市新中間層の若者という、タイにおける信者層とは、明らかに異なるタイプの人々が、日本では中心的な位置を占めている。なお、タンマガーイには日本人信者もいるが、そのほとんどは、信者の女性の配偶者(夫)である。

大阪別院で複数の信者に話を聞いたところ、その全員が、日本に来てはじめてタンマガーイ寺院に通うようになったという。タイに住んでいた頃からの信者というのは、ほとんどいないようである。彼女たちは一様に、タンマガーイ式瞑想の素晴らしさを語ってくれたが、それ以上に彼女たちをタンマガーイにひきつけているのは、そこに来れば同郷の人々と会えるという事実であ

るように思われた。つまり日本におけるタンマガイ寺院は、国を離れて異境の地に暮らすタイ人女性たちにとっての「コミュニティ」の役割を果たしているのではないか、ということである。共通の宗教を信仰する集団というよりは、在日外国人のためのコミュニティという性格が強いタンマガイ寺院は、日本における外来宗教の一つの典型であるように思われる。

4-3 日本テラワダ仏教協会

同じ上座部仏教系の外来宗教でも、上記のようなタンマガイ寺院とは全く異なる性格を持っているのが、スリランカ仏教系の団体である、日本テラワダ仏教協会である。テラワダ仏教とは、上座部仏教そのものを意味する言葉だが、この協会はあくまで上座部仏教の中の一派である。ここでスリランカ系という言葉を使ったが、この協会の本部にあたるような組織がスリランカにあるわけではなく、同団体は、基本的に日本独自の組織である。

日本テラワダ仏教協会の成立は1994年のこと、スリランカ出身の高僧、アルボムツレ・スマナサーラ長老を囲む日本人信徒によって、東京で設立された。2001年には、東京の渋谷に「ゴータミー精舎」を建設、以後ここが本部として、教団運営の中心となる。2003年に宗教法人としての登記を行い、2005年には大阪支部「アラナ精舎」を開いた。更に2009年には、兵庫県の三田に、3つ目の教団施設となる「マーヤデーヴィー精舎」を開設した。

協会の中心的存在であるスマナサーラ長老は、1945年スリランカの生まれで、13歳で出家した後、僧侶として修行を行うかたわら、母国の国立大学で仏教哲学の教鞭をとるなど、多彩な活動を行う。その後1980年に来日、初期仏教の伝道や、ヴィパッサナー瞑想の指導などの活動に従事した¹⁶⁾。きわめて流暢に日本語をあやつり、NHK教育テレビの「心の時代」などにも出演、朝日カルチャーセンターなどでも講師を務めてきた。また、来日以来数多くの本を執筆しており、専門的な初期仏教論から一般向けの人生論まで、これまで出版した本は、100冊近くにのぼる¹⁷⁾。

日本テラワダ仏教協会は、きわめて活発な活動を展開している団体で、定例行事として、「法話とヴィパッサナー瞑想の会」、「宿泊ヴィパッサナー瞑想会」、「スマナサーラ長老・月例仏教講演会」、「初期仏教を学ぶ勉強会」、「仕事帰りの瞑想会」、「ボーヤデー（満月の集い）」、などが行われているほか、様々な特別イベント、地域会員の自主活動（関西、東海、仙台、伊勢原におけるダンマサークル）などが実施されており、全国で見れば、ほぼ毎日どこかで何かの行事が行われていると言ってもいい状態である。

この協会に関しては、2008年の夏に、大阪の岸和田にあるアラナ精舎を訪問した¹⁸⁾。協会のために特別に建設した他の二つの教団施設とは異なり、アラナ精舎は、築100年以上の古い農家を、教団施設に転用した建物である。この建物は、その一帯の土地家屋の持ち主である信者のK氏が、教団に対して寄進したものであるという。K氏は、1948年生まれの男性で独身、長年母親の介護に追われてきたが、その母親が2003年に他界、それをひとつのきっかけとして、以前から関心を持っていたテラワダ仏教協会に入会、熱心な信者となる。その後、関西地方の活動の拠点と

するために、2005年に自宅を精舎として寄進した。現在は、関西における協会の世話役的な存在として、活躍している。

K氏によれば、「アラナ精舎」で行われる瞑想会などへの参加人数は、日によってまちまちだが、指導者である長老が来訪する場合は、平均して30名程度であり、更にスマナサーラ長老が来訪する際には、最大80名程度が集まったことがあるという。来訪者はほぼすべてが日本人で、大半が20～30歳代の若者であり、男女比はほぼ半々だが、やや女性が多いとのことであった。アラナ精舎では（というよりも日本テラワダ仏教協会では）、参加者の個人情報詳しく収集するということをしていないため、彼らの職業等は不明だが、K氏の印象としては、大阪などの都市部で働く普通の会社員のような人が多いという。精舎を訪れるきっかけとしては、まず第一に「スマナサーラ長老の著書を読んで関心を持った」というものが多く、その他「ウェブサイトを見て」とか「長老の講演を聞いて」といったものが続くという。こうした精舎来訪者が、いわゆる「信者」といったかたちの固定メンバーとなることは稀で、多くの人たちが、しばらく通った後に来なくなる、というパターンをとるといえる。つまり、来訪者は常に少しずつ入れ替わっているような状態が継続しているようだ。

4-4 まとめ

ここまで上座部仏教について、タイのタンマガーイ寺院と、スリランカ系のテラワダ仏教協会の二つを見てきたが、この二つは極めて対照的な存在であった。前者のタンマガーイ寺院は、タイで勢力を拡大する新宗教が日本に入ってきたものだが、日本においては、本国とは異なり、在日タイ人女性にとっての居場所・コミュニティとして、機能している面が強い。彼女たちの人間関係はきわめて緊密である。ここでは日本人は、信者の女性の配偶者というかたちで、副次的な役割を果たしているに過ぎない。これに対し、テラワダ仏教協会は、スリランカ仏教の流れは受け継ぐものの、基本的に日本独自の組織であり、会員もほとんどが日本人である。そのメンバーシップは非常に緩やかで、教団というものはばかられるほどである。それはむしろ、瞑想という癒しの技法を実践する、任意サークルのような存在であると言えよう。

ここでは限られた事例しか取り上げることができなかったが、現在日本に輸入されつつある仏教は、おおむねこの二つのタイプに分類することができると思われる。ここでは上座部仏教の事例だけを取り上げたが、それに限らず、例えば韓国系の大乗仏教（前者の例に近いと思われる）などもこうした議論の枠組で捉えることができるかもしれない。

おわりに

ここまで、近年日本において勢力を拡大しつつある外来宗教の現状について、イスラム教と仏教という二つの宗教に焦点をあてて検討してきた。当初の予定では、キリスト教についても取り

上げる予定であったが、紙幅の制約から、これについては別の機会にまわすこととした。

もちろんキリスト教自体は、カトリックもプロテスタントも、以前から日本社会に定着しているのであるが、近年とりわけ南米系のキリスト教が、日本の中で新たに勢力を拡大しつつある。とりわけ大きな勢力になりつつあるのが、ブラジル系のキリスト教である。これは、日系ブラジル人が、特別枠の外国人労働者として近年増加したことにより、急速に増えてきた。名古屋を中心とする東海地方などに、たくさんのブラジル人教会が作られており、関西地方においては、滋賀県などに、それは数多く見られる。ブラジル本国は、カトリック人口の多い国であるが、日本に入ってきているブラジル人教会は、プロテスタント系のものが多いなど、いくつかの特色が見られるようである。

他にも関西には、ペルー人が集まる教会というものが存在している。兵庫のカトリック住吉教会や、大阪のカトリック枚方教会などがそれで、ペルー本国で行われている「奇跡の王」の祭りを日本で実施することを通して、在日ペルー人にとってのコミュニティ形成を促す存在になっている。こうした、新たな外来宗教としてのキリスト教については、改めて詳しく論じたいと考えている。

限られた事例ではあるが、ここまでいくつかの外来宗教の現状を見てきた。日本を訪れる外国人、定住する外国人の数は、経済状況その他によって、これからも増減を繰り返すであろう。しかしグローバル化の進展自体は、後戻りすることはないと考えられる。だとすれば、われわれは今後ますます多くの外来宗教と接する機会を持つようになるだろう。全くの異文化であるそれら外来宗教と、どのような関係を築いていくのか、そうした場面において、「宗教的に寛容な国民」であるはずの日本人の真価が試されることになるのではないだろうか。

注

- 1) かつて東京には、代々木モスクと呼ばれる施設があったが、これは1986年に取り壊された。この状況に対し、トルコ人を中心とするムスリムたちが新たなモスクの建設を計画、トルコ共和国の宗務庁の監督のもと、2000年6月に、オスマン様式の壮麗なモスク・東京ジャーミイが完成した。その建設には、約12億円の費用がかかったと言われている。
- 2) 著者は本の中でこうした施設をもモスクと呼んでいるが、これらは正確には「ムサッラー」と呼ばれる一時的な礼拝場所であると思われる。
- 3) 「イスラム教」については、表現上の問題が色々と複雑である。「教」をつけるのは誤りで、「イスラム」が正しいとか、いや「イスラーム」が正しいとか、日本のイスラム学者の間にはあれこれ議論がある。しかし、「メッカ」ではなく、「マッカ」だとか、「コーラン」ではなく、「クルアーン」が正しいとか、そういったことも含め、筆者はいろいろ議論があることは知りつつも、基本的に世間一般に流通している表現を踏襲する。この点に関しては、池内恵の議論（池内：2006）を参照のこと。
- 4) いわゆるイスラム国ではないが、多数のムスリムが住んでいる国のことも無視できない。例えばインドは約1割（つまり約1億人）がムスリムであるし、中国にもウイグルなどにムスリムは多い。スリランカやミャンマーなど、アジアの国の多くには、一定数のムスリムが住んでいる。
- 5) 1989年に、パキスタンとバングラデシュに対して、査証免除取り決めの一時停止措置が取られ、更に1992年には、イランに対しても同様の措置が取られた。これは現在まで続いている。

- 6) ただし、数の変化については国によって違いがある。短期滞在者を除く滞日外国人数について、インドネシア人は2000年には17961人であったが、2007年には11160人と激減している。これに対し、その他の4ヶ国からの来日者数は、微増している。
- 7) このモスクは、かつて西淀川区の出来島にあったため、「出来島モスク」と呼ばれていたが、その後同じ西淀川区の中島に移転し、名前も「大阪モスク」に変わった。
- 8) OMAの活動としては、茨木モスクの運営の他に、大阪大学その他で、ムスリム用の祈りの場の確保を目指す運動や、大学や地方自治体のイベントでイスラム教について紹介する活動などがある。またOMAは、MSAJ (Muslim Student Association Japan) という全国組織の下部組織にあたり、このMSAJは毎年1回全国集会を開いている。2008年にはそれが大阪で開催され、約300人のムスリム学生が来阪したという。
- 9) ラマダンは、ヒジュラ暦の第9月のことを指す。イスラム暦では、1年は354日であるので、太陽暦である西暦とは毎年ずれていくことになる。2009年のラマダンは、8月22日から9月19日までであった。
- 10) セリム氏は、島根大学で地方行政を学んだ後、東京大学大学院を経て、トルコ大使館職員となった。その後2004年に京都に移り、京都大学大学院で研究を続けながら、2005年に京都モスクの立ち上げに尽力した。全国各地に数多くのモスク（イスラーム文化センター）があるが、ここほどイスラム文化の紹介を熱心に行っているところは稀である。セリム氏は他にも、「アラビア語講座や、「何でも聞けるイスラームQ & Aの会」、「セリム先生のティー・トーク」など、様々な催しを実施し、イスラム文化の紹介に努めている。
- 11) 例えばパキスタンでは、1984年に、次のような条例が布告されている。「アハマディア信徒には次のことを禁じる。直接的であれ間接的であれ、彼等自身をイスラム教徒と呼ぶこと。彼等の礼拝する場所をモスクと称すること。そしてムスリム達が礼拝の前に、礼拝に招くために呼びかけ、アザーンを同じ目的で行うこと。これらはすべて彼等に対する罰として定められたものである。同様に、アハマディア信徒は、彼等の宗教を、他の人々を帰依させる目的で、口頭により、著述により、あるいは視覚的に描写することによって広めようとする宣伝活動の一切を禁止する」（日本アハマディア・ムスリム協会HPより）。
- 12) アニース・アハマド・ナディーン氏は、1978年生まれのパキスタン人で、来日は2005年11月。来日してそれほど長くはないにもかかわらず、非常に流暢に日本語を話す知的な人物で、日本支部を指導するイマームとして働くよう、本部から派遣されたという。今後、本部から指令があれば、また別の国に移る可能性もあるとのことであった。
- 13) ジョン・ヒックは、イギリスのキリスト教神学者。『宗教がつくる虹』など多くの著作において、様々な宗教の神は、同一の存在が異なる仕方で見えているに過ぎないとする「宗教的多元主義」を唱えた。また、彼の思想は、晩年の遠藤周作に大きな影響を与えたことでも知られる。遠藤の最後の小説である『深い河』は、ヒックの思想を作品化したものであると言われている。
- 14) このタンマガイ寺院について、詳細は矢野秀武の研究（矢野：2006）を参照。
- 15) 現在支部があるのは、東京、大阪、長野、栃木、神奈川、茨城、埼玉の、7箇所である。
- 16) ヴィパッサナー瞑想は、上座部仏教における一般的な瞑想法であり、必ずしもこの協会に特有のものではない。この瞑想法の伝授をうたう団体は、他にも日本に入ってきている。その一つである「日本ヴィパッサナー協会」は、京都や千葉などにかなり立派な施設を構え、瞑想の指導を行っている。詳しくは協会のホームページを参照のこと。
- 17) 代表的な著作としては、以下のようなものがある。『怒らないこと―役立つ初期仏教法話（1）』（サンガ、2006）、『「やさしい」って、どういうこと？』（宝島社、2007）、『自分を変える気づきの瞑想法―やさしい！楽しい！今すぐできる！図解実践ヴィパッサナー瞑想法』（サンガ、2004）、『仕事でいちばん大切なこと』（マガジンハウス、2009）。
- 18) 「アラナ」とは、日本語で「安寧」のことを意味する言葉である。

＜参考文献＞

- 池内恵、2006、『『中東問題』は『日本問題』である—バーナード・ルイスの書評から』（『書物の運命』文藝春秋）
工藤正子、2008、『越境の人類学—在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会
桜井啓子、2003、『日本のムスリム社会』ちくま新書
樋口直人他、2007、『国境を越える—滞日ムスリム移民の社会学』青弓社
裴 昭、2007、『となりの神さま—ニッポンにやって来た異国の神々の宗教現場』扶桑社
矢野秀武、2006、『現代タイにおける仏教運動—タンマガーイ式瞑想とタイ社会の変容』東信堂

＜参考ウェブサイト＞

- イスラム便利帳—国内のマスジド（モスク一覧）…
<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/benri/benriindex.htm>
タイ国タンマガーイ寺院…<http://www.dimcjp.org/>
日本アハマディア・ムスリム協会…<http://www.alislam.org/japan/>
日本ヴァイパッサナー協会…<http://www.jp.dhamma.org/index.php?id=940&L=12>
日本テーラワーダ仏教協会…<http://www.j-theravada.net/index.html>